

平成 29 年度学校評価結果報告書

(年度末評価)



広島県立福山葦陽高等学校

(定時制課程)

目 次

1 自己評価結果

- (1) 平成 29 年度自己評価シート（年度末評価）・・・・・・・・ 1
- (2) 平成 29 年度自己評価シート（年度末評価まとめ）・・・・ 6

2 学校関係者評価結果

- (1) 平成 29 年度学校関係者評価シート（年度末評価）・・・・ 8

平成 29 年度自己評価シート(年度末評価)

校番	012	学校名	福山葦陽高等学校	校長氏名	小林 泰崇	定時制	本校
----	-----	-----	----------	------	-------	-----	----

※ 評価基準

	年度末評価	
	評価	基準
自己評価	A	目標を完全に達成した。
	B	目標を概ね達成した。
	C	目標をあまり達成できなかった。
	D	目標をまったく達成できなかった。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			
1 「強く」 自ら考え行動することで、人生を切り拓いていくことができる確かな学力と体力を育成する							
生徒の主体的な相互活動を促すことにより、基礎学力が定着し、それを活用する姿勢が育まれている	定期考査における基礎力定着問題の通過率上昇率	国語(1年次 19%, 2年次 1%アップ) 数学(1年次 0.2%ダウン, 2年変化無し) 外国語(1年次 12%, 2年次 % 33.7%アップ)	国語, 数学, 外国語各7%アップ(1学期→3学期)	国語(1年次 19%アップ, 2年次 10%ダウン,) 数学(1年次 16%, 2年次 28%アップ), 外国語(1年次 5.8%アップ, 2年次 14.8%ダウン)	B	○1年次生の通過率が上昇し, おおむね目標値に近づいた。 ●一方, 2年次生の通過率が下がり, 目標値には達成できていない。2年次生の学力定着については例年の課題である。	教務
	定期考査での活用問題の無答率	国語 33% 数学 75% 外国語 53.8%	各教科 50%以下	国語 39% 数学 54% 外国語 61.1%	C	●国語は目標値を達成したが, 数学・外国語は目標を下回った。 ○ただし, 基礎学力で定着率が下がった2年次生において, 外国語の無答率が45%であった回もあり, 一定の成果は出ている。	教務
	検定試験受験人数(資格取得した生徒が上級資格を受検する数)	※参考資料 155(28年度検定受験人数総数)	30	70	A	○目標値を大幅に上回った。 なお, 全体の受験者数は, 商業・情報が198名, 漢字検定5名, 英語検定4名であった。	教務 進路指導

【評価結果の分析】

- 1・2年次生において、定期考査で基礎的・基本的な内容を問う問題を出題し、通過率の推移を見ている。1年次生の最初は中学校の「学び直し」を中心に反復学習を一定の時間取り入れることで成果が出ている。
中学校時に特別支援学級に在籍していた生徒は根気強く基礎・基本の繰り返しに取り組める者が多く、努力が得点に結びつく経験が学習への意欲を高めている。数学以外の2年次生の定着率低下が例年より大きく、指導の改善が必要である。
- 表では国語・数学・外国語(英語)について挙げている。外国語においては、絵図の説明では45%だった無答率が新聞記事を読んで意見を述べる問題では無答率が61.1%になった。課題文の量や問われた内容によって大きく数値が変化している。地歴公民科の無答率は18%、理科は30%であった。理科(地学基礎)に苦手意識を持つ生徒が多いが、防災に関する論述問題を出した回では無答率が下がるなど、身近な課題に対する関心の高さがうかがえる。また、保健体育科ではICTを活用した授業により生徒が具体的なイメージを持って自らの生活や現代の健康課題について考えるようになり、無答率が13%となったクラスも見られた。家庭科の無答率は1年次生が61%と高かったが3年次生は30%と低い。学年が上がるにつれ試験の形式に慣れてくることで意見表明がしやすくなると考えられる。
- 昨年度に引き続き商業・情報検定の受検者数が伸びている。クラスメイトが資格取得する姿を目の当たりにすることで、検定合格のイメージを具体的に持つことができるようになり、試験に取り組む意欲が向上したと考えられる。また英語検定においては、受検者4名全員が合格している。特に、3年次生1名が準2級に合格しており、個に応じた学習と目標達成までの具体的なイメージを持たせることで意欲を継続させる指導の効果が見られた。

【今後の改善方策】

- 1年次生については学習習慣の定着を目標に今後も基礎的・基本的事項の反復を続けていく。また、例年「中だるみ」の状態が出てくる2年次生については、定着率の低下だけでなく、遅刻・欠席の増加という特徴も出ており、学習意欲と関連していると考えられる。担任、生徒指導部と連携し、基本的な生活習慣の改善も含めた全体的な底上げ指導の方法について検討していく。
- 基礎学力の定着率が低くなった2年次生が逆に活用問題において積極的に答える姿勢が見られた教科(国語)もあった。また、情報科では質問や指示を具体的にすることで82%の生徒が活用問題に取り組むようになった。
身近な課題に対しては主体的に取り組むこと、発問や指示の仕方によって意欲の変化が大きくなることから、意欲を継続させる教材選択や学習指導の方法について研修を定期的に行っていく。
- 検定合格者は始業式等、全校生徒が集まる場で披露表彰している。また、昨年度海外短期留学に参加した生徒が今年度全国高等学校生徒英作文コンテスト入選を果たした。海外での学習経験によって英語学習の必要性を実感したことが意欲の継続に役立っていることが分かる。
来年度は数学検定の実施も計画しており、さまざまな検定の情報提供と合格に向けた指導を行っていく。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			
2 「正しく」 自ら律し他者と協働することで、地域や社会に貢献していくことができる態度を育成する							
自己肯定感が高まり、社会性を身につけるとともに、勤労観・職業観を醸成し卒業年次の進路実現が図られている	「特別な指導」件数の中での再指導率(2回以上特別な指導を受けた生徒の割合)	30% (総数 135 件)	18%	20%	B	○「特別な指導」件数の中で 20%の生徒が再指導を受けている。目標値より 2% 上回ったが、昨年度と比較すると 10%減少している。 今後も丁寧な指導により再指導率を下げる必要がある。	生徒指導
	「挨拶向上実績度数」の中で「毎日挨拶をする」生徒の割合	51%	80%	80%	A	○「毎日挨拶をする」生徒の割合は 80%であり、目標値と同じ値となった。 ○昨年度から約 30%増加しており、挨拶をする生徒が増加しているという結果がでた。	生徒指導
	月間遅刻数が 1 以下の生徒の数(年間 11 以下)	19%	25%	20%	B	○月間遅刻数が 1 以下の生徒は全体の 20%であり、目標値を 5%下回った。 ●しかし、昨年度と比較すると、1%増加している。	生徒指導
	生徒アンケートによる生徒会行事満足度	80%	90%	86%	B	●学校アンケートでは、学校行事の満足度は 86%であり目標値に 4 ポイント届かなかった。 ○今年度初めて実施した運動会等の行事後の生徒・保護者の感想では、肯定的な意見が多かった。集団競技や、集団活動を通して、他者との交流・理解や達成感(自己肯定感)をもつことができた様子が伺えた。	保健 美化
	卒業年次の進路実現率(%)	94%	100%	100%	A	○今年度は卒業予定者が 9 名と少なく個別に丁寧な対応ができた。 ○また、求人が潤沢であったことなどもあり 12 月末までに縁故での就職を希望した生徒以外の進路希望を実現することができた。縁故を希望する生徒への対応には課題が残った。	進路指導

【評価結果の分析】

- 「特別な指導」件数の中での再指導率(2回以上特別な指導を受けた生徒の割合)が目標値の18%に対し、実績値20%とおり、目標値を2%上回っている。しかし、昨年度と比較すると10%減少しており、今後も指導を丁寧に関わり強く行い、再指導率を減らしていきたい。
「挨拶向上実績度数」の中で「挨拶をしていますか」という問いに対して肯定的な回答をした生徒の割合は、目標値 80%に対し、実績値 80%となっており、目標値と同じ値になった。教職員からのあいさつにも答える生徒が増加している。
月間遅刻数が1以下の生徒は全体の20%であり、目標値を5%下回った。しかし、昨年度からは1%ではあるが、増加している。
- 学校アンケートでは、学校行事に満足している生徒が86%である。また、行事後には、生徒だけでなく参加された保護者からも肯定的な感想であった。遠足・芸術鑑賞等の校外の行事では、登下校や学校生活以外の活動を通して、社会性や自主性を高める経験をする事ができた。
また、スポーツ大会では、競技を楽しみながら他者と協力して成し遂げたり、係の役割を果たしたりする経験をして、達成感(自己肯定感)を感じる事ができた様子が伺えた。
- 卒業予定者9名の進路内訳は、大学進学1名、専門学校進学2名、就職(学校または職業安定所からの紹介)5名、縁故就職希望1名となった。大学、専門学校を希望した生徒は、早期からの取り組みや準備ができたこともあり、推薦入試で進路実現ができた。就職希望者は、9月の1次試験で3名が応募した。その後も順次、縁故希望から学校または職業安定所からの紹介への希望変更をした生徒と高卒程度認定試験の合格により、卒業者となった生徒が10月から就職活動を始めたが真摯な取り組みと好調な求人のおかげで、12月末までに5名全員が希望の事業所への内定を得ることができた。
1学期末において、縁故を希望する生徒が2名あった。四者懇談(担任、本人、保護者、進路指導部)などを経て、1名は縁故就職の希望を解消でき、正規雇用での就職ができたが、他の1名は、面接試験を受けたが正規雇用に至らず、自営業に就職することになった。縁故就職についての課題を残した。

【今後の改善方策】

- 「特別な指導」の再指導率や、問題行動の件数は少しずつであるが、減少している。引き続き、生徒が決められたルールを守り、自らが行動を選択し、その行動に責任を取る機会を与え、自己指導能力を育成していきたい。また、挨拶向上実績度数にもあらわれているとおり、挨拶をする生徒が増加しているため、教職員・生徒が挨拶をしようとする共感的人間関係の育成を進めていく。
- 生徒会行事を通して「自分はやろうと思えばできる(有能感)」「周りの人から受容されている(他者受容感)」を感じる経験をして、学校生活を意欲的に送られるよう、生徒会執行部を中心に生徒主体で生徒会行事を運営することを目指す。
- 就職では、出席状況が十分でなく調査書の発行が遅れる生徒においても、学校または職業安定所からの紹介をあきらめさせない取り組みが必要である。今年度、縁故就職において、雇用条件の開示の困難性や面接においてプライバシーに踏み込む内容があるなどの課題を残した。今後は、卒業年度における学校への定着、早期からの情報提供、保護者との連携の積み上げに力を入れ組織的な課題としていく必要がある。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			
3 「美しく」 グローバル化する社会の中で、多様な人々となつながらすることができる姿勢を育成する							
地域に学ぶことを通し、社会的な視野を拓げ、他者と共生できる姿勢が身についている	「体験的な学び」における社会的な視野が広がった生徒の割合	62%	70%	86%	A	○目標値を上回ることができた。 ○特に「総合的な学習の時間」、3年次生「食文化」におけるテーブルマナー講習について記載する生徒が多かった。	教務 生徒指導
	校外清掃活動等への参加率	70% 7人	80% 10人	保育ボランティア参加者 4名 校外清掃今後実施予定	(B)	○保育ボランティアに4名参加した。 ボランティア活動を通して新たな発見・学びをしており、社会的視野を拓げることができた。	保健 美化

【評価結果の分析】

- 「体験的な学び」については、この三年間で特に積極的に導入している。「総合的な学習の時間」においては、パソコンを扱う「情報・メディアコース」選択生が広島県立歴史博物館を見学した後、地域の歴史と文化を紹介・発表することをテーマに作品制作を行った。また、3年次生「食文化」におけるテーブルマナー講習では穴吹調理専門学校にご協力をいただいた。
生徒全員がスーツを着用し、コース料理を食べることを通して教科書で学んだマナーを実践した。いずれも、事後に学習成果を資料にまとめて発表するというゴールを設定することで、明確な目的意識を持って体験学習に臨むことができた。
- 介護ボランティアは、感染症の流行予防のため参加できず、保育ボランティアに希望者4名が参加した。施設の変更のため事前周知が不十分となり、目標人数には達しなかった。しかし、ボランティア活動を通して、学校生活では気づかなかった生徒のやさしさに気付くなど参加生徒同士の理解を深めることができた。
また、子どもの特性や保育士の職務を知ることができ、社会的な視野を拓げ、他者とのつながりの重要性を知る機会となった。

【今後の改善方策】

- 「体験的な学び」をその場の行事で終わらせず、いかに目に見える形として残していくか今後も工夫していく。発表者にとっては言語化することで学習が深化し、聞く側にとっても聞く態度を学ぶ学習になる。
まとめ方や資料作成の方法についてはまだ改善の余地があるため、国語科や地歴公民科との連携を今後も進めていく。
- 1・2年生のマナーが全体的に向上しており、体験的な学習に参加した生徒は前向きな感想を書いている。これまで十分な社会性が育っていないとして3年次生以降に行っていた学習を徐々に取り入れていくことを検討している。また、候補には選ばれなかったものの今年度も海外短期留学参加に向けて外国語の学習に取り組んだ生徒もおり、多様な体験学習を提示していくことが有効である。
- 今後実施予定の校外清掃では、清掃活動を通して地域の理解やつながりを自覚できるよう指導する。
校外奉仕活動を通して、他者や地域や社会を理解したり、自己有用感を高められる経験ができるよう、次年度以降も、継続して計画的に取り組む。

平成 29 年度自己評価シート(年度末評価まとめ)

校番	012	学校名	福山葦陽高等学校	校長氏名	小林 泰崇	定時制	本校
----	-----	-----	----------	------	-------	-----	----

1 評価結果の分析

■「強く」自ら考え行動することで、人生を切り拓いていくことができる確かな学力と体力を育成する

- 各行動目標の評価は、『B・C・A』であった。低学年の段階から、『学び直し』も含めた基礎・基本の反復学習を徹底するとともに、年次が進むに連れて応用力等の汎用的能力を培う指導も計画的・継続的に進め成果が出ている。
- 『学びの変革』に向け、発問の工夫や副教材の精選・ICTの積極的導入等を組織的に推進してきた。様々に創意工夫を凝らし、生徒の興味関心を高め自律的・能動的・意欲的な学習姿勢を引き出す指導に力を入れてきた。課題発見解決学習やピア学習も徐々に定着してきた。
- 昨年度に引き続き各種検定試験に向けた取組は組織的・構造的に進め、今年度は英検準 2 級や商業情報系の 1 級等の合格者もでた。クラスメイトが資格取得に向けて学習し合格する姿を目の当たりにすることで、検定合格のイメージを具体的に持つことができるようになり、検定試験に取り組む意欲が向上するとともに、全体の場で校長から表彰され自己肯定感が高まり、生徒全体の『学びに対する主体性や積極性』が高まった。

■「正しく」自ら律し他者と協働することで、地域や社会に貢献していくことができる態度を育成する

- 各行動目標の評価は、『B・A・B・B・A』であった。自ら考え判断し行動する能力を高め自律的に生きる力を育むことを目標として、根強い指導を組織的に継続した。全般的には、生徒は落ち着いてきたし、社会的自立に向けて自己を高めようとする学校風土の醸成も組織的に推進している
- 規則を守り心穏やかに授業に臨む取組を強化するとともに、学校行事やボランティア、生徒会活動等、体験的教育活動を充実させ生活意欲を高め学習意欲を育む教育活動を推進した。特に、今年度初めて挑戦した『運動会』では、合意形成を図り、他者と協働して物事を作り上げていく難しさと充実感等を学ぶことができた。一方で、特別な指導の再指導率等で目標が達成できず課題が残った。
- 学習と就労を両立させ、進学率・就職率を高める取組の推進にも力を入れ、卒業予定者の進路確定率は 100%を達成し、就労率も 80%近い。一方で特別支援教育の更なる充実を図り、生徒個々の実態や特性、教育的ニーズに即した将来設計を生徒・保護者と綿密におこない、自己実現に向けた展望や方向性を明確にした指導の深化が求められる。

■「美しく」グローバル化する社会の中で、多様な人々となることができる姿勢を育成する

- 各行動目標の評価は、『A・(B)』であった。定時制に学ぶ生徒には、小中学校での不登校経験者や人間関係づくりに困難性を示す生徒が少なくない。社会的な自立に向け、学校内外での様々な体験を通じて、コミュニケーション能力を培い社会性を高める教育を最重要課題の一つに位置づけ取組を進めた。教科学習と総合的な学習の時間や各種行事等が相乗効果を生み出すような教育課程を構造的・計画的に作成することが急務である
- ボランティア活動やインターンシップ等を積極的に取り入れ、社会の形成者としての自らを客観視し、克服すべき課題を明確にするとともに、勤労観や職業観の育成につながるような教育内容の実効性を高めなければならない。
- 昼間定時制の特徴を活かして、午後の時間帯を有効活用することにより、社会的視野を広げ望ましい勤労観を育む取組、及び、幅広く柔軟性のある学習機会の創造が課題である。

2 今後の改善方策

■「強く」自ら考え行動することで、人生を切り拓いていくことができる確かな学力と体力を育成する

- ◆ 『生徒が“学びたい・できるようになりたい”と思う授業の創造こそが定時制の活気と安定を導く』という共通認識の基、教材作成や授業展開等が、個々の生徒の特性や困難性を踏まえ教育的ニーズに応えるものになっているか、形式的なものになっていないかを評価軸としてシラバスの再検討やルーブリックの策定に着手するとともに、入学から卒業までを見通し、それぞれの段階で身につけさせたい資質・能力を明確にしたカリキュラムマネージメントを強化する。
- ◆ 昨年度より組織的に推進している『学びの変革に向けた授業づくり』に係る取組を更に強化する。具体には、授業のねらいや流れを明確にし、これを授業当初に明示すること等により、生徒が見通しを持って落ち着いて授業に臨めるようユニバーサル・デザイン化や見える化の実効性を更に高めるとともに、フラッシュカードやホワイトボード、電子黒板等のICT教材等の有効活用、及び生徒の疑問や興味関心を引き出し思考を深めるような発問や授業展開の研究と実践、ピア学習の充実等を意図的・計画的に推進し、生徒が充実感・達成感及び自己有用感を持つことができる授業・教材のあり方について創意工夫する仕組みづくりを継続し組織全体の教育力を高める。
- ◆ 授業の中に基礎基本の徹底と応用力や課題発見能力・問題解決能力の育成をバランスよく配置し、生徒の意欲や思考を活性化する授業をつくる取組を継続するとともに、遅刻早退等に係る指導も強化し規則と秩序の守られた学習環境の確保に向けた取組も強化する。

- ◆ 検定試験に向けた取組は大きな教育効果を生んでいる。来年度は数学検定の実施も計画しており、さまざまな検定の情報提供と合格に向けた指導を組織的に展開し、学校全体で『資格を取ろう。やればできる。』という士気を高める取組を継続するとともに、生徒全体の学ぶ意欲そのものが高まり、生徒同士が良い影響を与え合い相互に高め合う学習機会を充実する。
- ◆ 発達障害や様々な困難性を有する生徒、義務教育段階で不登校を経験した生徒等の割合が加速的に増加している実態を踏まえ、保護者や関係機関等の協力体制を更に強固なもとして、それぞれの果たす責務・役割を明確にする中で、個別の支援計画を立て、社会的自立に見通しが持てるような支援を組織的・計画的に進める。
- ◆ 生徒が主体的に学ぶ授業の創造に向け、OJTを中心とした研修体制の構築を更に推進するとともに、簡易指導案やVTR等を活用した授業の相互参観や事後の学習会等、相互研鑽の場を創り、組織全体の授業力の向上に繋げる

■「正しく」自ら律し他者と協働することで、地域や社会に貢献していくことができる態度を育成する

- ◆ 規則やルールを守り、自らが行動を選択し、その行動に責任を取る機会を与える取組等を組織的に推進し、自己指導能力の育成に力を入れる。併せて、教職員・生徒が自然に自発的に挨拶をしようという共感的人間関係の育成を継続して進め人間関係形成能力の向上を図る。
生徒個々の生活実態や課題に係る情報交換会の実効性を更に高め、生徒の課題を共有し具体的な手立てや指導・支援の方向性を明確にする。そして、計画的・継続的な教育活動を学校全体で展開する仕組みを確立し、課題解決に向けて最も有効な指導を組織的・統一的に進め、自主・自律を促す取組を継続する。
- ◆ 自己肯定感や自尊感情等を高めることは社会人基礎力を育むうえで不可欠である。教科学习到に留まらず、生徒会行事や学校行事、特別活動等のあらゆる教育活動を通じて「自分はやろうと思えばできる(有能感)」や「周りの人から受容されている(他者受容感)」を高める取組を強化する。
同時に、学校生活を意欲的に送られるよう、生徒会執行部を中心に生徒主体で生徒会行事を運営する集団づくりを目指す。
- ◆ 進路実現に向けた意欲や覚悟・気概を高める指導を強化することにより、基本的生活習慣を確立させ、卒業年度における学校への定着率を高めて、早期からの情報提供を計画的継続的に行い、学校全体のモラルを高める。
また、生徒や保護者との面談の充実を図り、社会参加に不安を抱える生徒の内面や潜在的意識、課題等を的確に把握し、系統のかつ客観的に指導や支援の方向性やその具体を明らかにして、将来に展望をもって自らの成長に挑戦していく意欲と自主性を育む教育内容を創造・実践する。
- ◆ ハローワークや企業及び行政、専門性を有する関係機関等との連携強化を推進するとともに、インターンシップやボランティア活動、進路講演会(生徒や卒業生の生活体験報告を含む)等の充実を図り、自らのキャリア設計に係る意欲の向上に向けた取組を更に強化し実効性を高める。

■「美しく」グローバル化する社会の中で、多様な人々とつながることができる姿勢を育成する

- ◆ 清掃活動やボランティア活動等の体験的な学習も含め、他者を理解し、社会と自己との関係性を見つめ直す教育活動の充実が、様々な経験や体験が十分でない定時制生徒の生きる力を育む上で最重要課題のひとつである。体験的学習の体系化を図り、考えの異なる他者と意見交換・合意形成し、協働して課題解決する学習内容を教科の枠を超えて設計し、カリキュラムマネジメントを推進する。
具体には、「体験的な学び」をその場の行事で終わらせず、その後の指導に繋げていくとともに、体験発表会等に係る指導における言語化をつうじた学習効果の深化、及び聞く側の態度やマナーを学ぶ学習機会の充実を図ったり、様々なプレゼンテーションの機会を意図的につくり、まとめ方や資料作成の方法に係る指導や支援の在り方の研究等を、国語科や地歴公民科との連携を今後進めたりしていく。
- ◆ 集団行動や行事を苦手とする生徒が多いが、「行事を通じて達成感や責任感を持てた。」という自己分析もあり、行事等の体験的学習を通じて身に着かせたい力を明確にし、その為の手立てや仕掛けづくりを綿密に計画して、行事のマンネリ化を防ぎ、生徒の声を反映させて、生徒が楽しめる魅力ある行事になるよう工夫していく。
- ◆ 基本的には、日々の授業の中で各教科の特性を生かして体験的な内容を積極的に導入・展開しなければならない。『主体的・能動的な学びへの変革』に向け、組織的に取組を推進する。同時に、昼間定時制の特性を活かし、就労体験から学んだ社会性や勤労観等を生徒相互に共有する教育内容を深化させる。

3 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策

様式8のとおり、学校関係者による評価は、全ての評価項目に渡って『B』評価が多かった。今年度の学校経営目標達成に向け、組織的・継続的な取組を推進し成果を挙げており、次年度も更なる教育内容の充実に向け、組織が一丸となって邁進するように指導・助言を得た。

この時、生徒個々の生活実態や教科学力等を正確に把握し、これを踏まえた指導・支援の具体を熟議して、共通認識を持って組織的に取り組みを進めることが肝要であり、『社会人基礎力を育み社会的自立を支援する取組』とは何かを常に自問しながら、軌道修正を繰り返し、生徒が生き生きと学習に臨む定時制を創造することへの決意と覚悟を新たにした。

平成 29 年度学校関係者評価シート(年度末評価)

平成 30 年 3 月 31 日

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	小林 泰崇	全(定)通	(本)分
----	----	-----	--------------	------	-------	-------	------

評価項目	評価	理由・意見
目標, 指標, 計画等の設定の適切さ C・B・B・B	B	○「定期テストでの活用問題の無答率」を指標として扱うことについては、分析にも書かれているように、課題文の量や問われた内容により大きく数値が変化するのは当然であって、この数値だけで評価するのは適切ではない。 ○学年によって生徒の実態は毎年一定ではなく変化している状況があると考え。義務教育段階での学習習慣・生活習慣のかくりつの課題も大きく影響していると推察する。 ○前年度からの数的成長を目標とすることも大切であるが、生徒実態に合わせた目標数値の設定が必要である。 ○学校経営計画におけるミッション, ビジョン, 環境分析を踏まえて、目標, 指標, 計画の具体がおおむね適切に設定されていると判断する。
目標の達成状況の評価の適切さ C・B・B・B	B	○目標値と実績値を単純に比較しての評価になりすぎている。特に、目標を超えればAで、届かなくても前年より良ければBという評価になっているが、結果よりもそれに至る取組みの過程が重要である。 ○おおむね適切である。 ○計画の進捗状況に係る具体が明示され、概ね適切な評価がなされている。
目標達成に向けた取組みの適切さ B・B・B・B	B	○ボランティアや郊外清掃活動に留まらず、様々な機会をとらえて参加できるような体制を作してほしい。 ○おおむね適切である。 ○新しい行事を始めること等により、生徒が学校へ行くことや学ぶことの楽しさを感じるような取組を積極的に展開しようとしている姿勢が評価できる。 ○目標達成に向けた取組は、生徒状況を踏まえた内容であり、概ね、適切になされている。成果の見られた事項、不十分な事項についてそれぞれ整理し、次年度の経営改革に反映させ、実効性のある取組とすることを期待する。
評価結果の分析の適切さ C・B・B・B	B	○「自己実現に向けた展望や方向性を明確にした指導の深化が求められる。」というのは主体が明確でない。「教科学習と総合的な学習の時間や各種行事等が相乗効果を生み出すような教育課程を構造的・計画的に作成することが急務である。」については、具体的に何をすべきかが見えて来ない。 ○理由の表記があれば更に分かりやすい。 ○各項目に対し、具体的な事実に基づいた現状と課題が明示され、概ね適切な評価結果の分析がなされている。
今後の改善方策の適切さ B・B・B・B	B	○海外短期留学に参加した生徒が、全国レベルの英作文コンテスト入選を果たしたことは大きな成果であり、今後も生徒が達成感を味わえるような取組みを行っていただきたい。 ○課題となった項目の要因分析が改善に繋がると考える。 ○今後も、生徒が活力を持って日々を過ごせるように、生徒一人ひとりに手をかけ時間をかけて取組を進めて欲しい。 ○評価結果の分析を踏まえ、各項目ごとに具体的な改善方策が仔細に提示され、概ね、適切な内容である。
総合評価 B・B・B・B	B	○分析・改善方策共にうまくまとめられているが、評価のためではなく、教職員個々が納得して、生徒が社会人として一人前に生きていくことができるような取組みを期待している。 ○おおむね適切である。 ○生徒固有の課題を踏まえ、定時制として、これにどのように応えているか、どう応えようとしているかが十分に伺える内容であった。 ○次年度の経営計画の更なる充実に向け、どう応えようとしているかを十分に吟味して具体的な方策や方向性を探ってほしい。